

東京大学

理学部 広報

第3巻 第7号 昭和46年7月25日

6月理学部会合日誌

- 1日(火) 13:00~14:30 教務委員会
2日(水) 12:00~15:00 会計委員会
15:00~17:00 主任, 総合計画合同委員会
9日(水) 11:30~13:30 人事委員会
12:00~14:00 情報科学設立準備委員会
13:00~15:00 教務委員会
14日(月) 14:00~16:30 理学系研究科委員会
16日(水) 13:00~17:00 教授会
23日(水) 13:00~16:00 主任会議
30日(水) 卒業証書授与
13:30~15:00 教官懇談会

7月理学部会合日誌

(7月21日まで)

- 7日(水) 13:00~15:00 教務委員会
13:00~15:00 会計委員会
15:00~17:00 教官懇談会
14日(水) 13:00~15:00 主任会議
15:00~ 人事委員会
16日(金) 16:30~17:40 学部自治会と学部長会見
19日(月) 12:30~13:40 理職との会見
14:00~17:00 理学系研究科委員会
21日(水) 13:00~17:00 教授会

教授会メモ

6月16日(水) 定例教授会 於4号館物理会議室

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 研究生の入学について
4. 学部学生卒業見込者について
5. 転学科学生について
6. 学生の休学
7. 受託研究員の受入報告
8. 寄附の受入について
9. 会計委員会報告

島内委員長より概算要求中の特別設備費などについて報告があり, 本年度の予算配分の方針, および特別部長保留金について説明があった。

また, 学部長から全学の予算構成の概略などについて補足説明があった。また, 概算要求の基本方針としては 1) 大学院の整備 2) 大学院に固有講座の開設 3) 講座研究部門の増設 4) 附属設備の整備 5) 建物等施設の整備, などがあるとのこと。

10. 人事委員会報告 (今井委員長)

臨時職員の定員化, 新採用, 特別昇給などについての報告。6月1日現在で理学部の臨時職員は38名である。

11. 総合計画委員会

当面の問題は来年度の概算要求に関係した建物関係であり, 現在, 理学部中央館の構想などがある。いろいろな困難もあるが, 理学部全体の協力によって必要な建物の整備の実現をはかりたい旨, 学部長から述べられた。

中央館についての理学部としての希望は面積14,865m²ここに主として化学, 生物化学, 天文を収容し, 現2号館を主として生物関係, 3号館を主として地学

関係にあてることが適当であろうと考えられる。

これは5年ないし10年までの計画であり、それ以後は耐用年限を過ぎる建物もあり、これらを含めて考えて行かなければならない。

河田委員長から、施設部ほか、学内関係者とこの問題について懇談した旨、説明と報告があった。

12. 教務委員会

委員長大木教授から教養学部における第4学期専門科目の現状、とくに時間割編成に関する問題等について説明があった。

臨時カリキュラムの3年4年への科目は9月までに各教室から委員会宛通知願いたい。

また、学士入学については他学部との関係をも考慮して今後検討したいとの報告があった。

13. その他

○改革について 今後の改革のために、各部署における自己点検を進めてほしい旨、総長から要望があった。

これに関連し、本学部と教養学部との意志の疎通にさらに努める必要があることが、指摘された。その外学部一貫教育、大学部制についての意見が交えられた。

○高橋教授（情報科学研究施設長）から情報科学連絡委員会における同委員会の情報、連絡の文書送付についての協力方要望があった。

○次回の公開講座は「海」という題で行なわれる予定で、理学部からは吉田教授（地物）が企画委員に加わることになった。

7月21日（水） 定例教授会 於4号館物理会議室

1. 前回議事承認
2. 人事異動等報告
3. 学生の休学について
4. 転学部について
5. 研究生の入学について
6. 学内状況について

○理学部では6月30日附で207名が卒業した。

○大学は農学部キャンパスの不法残留者の退去をかねてから要求していたが、これに従わないものがあるので警察官の警備のもとに7月20日不法残留者を退去させた。

○教育学部長として最近水野教授が選任された。

○公務員共闘のストライキの一環として東大職組のストライキが7月15日朝に行なわれた。7月19日には定例の理職と学部長との会見が行なわれ、ストの

問題のほか宿直の手当、責任範囲などが論議された。

○学部学生自治会の求めに応じ、7月16日、生物化学科教官人事の進行に関して学部長と自治会委員数名の会談が行なわれた。

○改革委員会から改革問題について各部署での自己点検が要望されているので、理学部でも各教室で議論を進めてほしい旨、学部長から要望があった。

7. 会計委員会報告

まず学部長から来年度の概算要求について説明があり、本年度の予算配分については、全般的なことの説明があった後、(国家予算との比率など別表参照)、下郡山委員から理学部の校費予算配分案について説明があり、原案通り承認された。

8. 人事委員会報告（今井委員長）

7月14日に開かれた委員会について報告

9. 幹事会報告（後藤幹事長）

総合計画委員会と合同で改革問題に関する教授懇談会を6月30日と7月7日に行なった。

10. 改革問題について

11. その他

小松助教授から7月7日に開かれた教務委員会について報告があった。卒業時期、専門科目の決定、他学部の聴講、学士入学者に関する内規等の検討が行なわれている。

明年春の卒業時期は4月末の予定であったが、これを3月末に繰上げる方針を決定した。

小松助教授から臨時カリキュラム実施委員会の報告があった。

予 算 と 比 率

a. 国の総予算	9,414,315,280 千円	b/a = 11.1%
d. 文部省関係	1,041,034,567	c/b = 32.8%
c. 国立学校	341,069,122	d/c = 7.05%
b. 東大総予算	24,045,938 (当初)	

昭和46年度科学研究費補助金

理学部関係

物理系: A 山本 祐 靖 反陽子と陽子との反応による中間子の研究

斎藤 正 徳 岩石・鉱物の微細構造および物性による地球惑星内部構造の研究

- B 伊藤清三 数理解物理学の位相解析的・数値解析的研究
 山下泰正 天体にあらわれる分子線スペクトルの研究
- 化学系: A 佐々木行美 金属-金属間結合を持つ錯体の研究
 B 朽津耕三 低速電子衝撃による気体分子の励起過程の研究
 岩生周一 本邦新生代の火山岩・火砕岩およびそれに伴う鉱床中の微量元素の研究
- 生物系: A 寺山宏 動物細胞の分化および増殖制御の分子的機作に関する研究
 B 佐藤七郎 植物細胞の代謝における細胞器官の相互関係

- 関田 正実 田島 譲二 田中 文彦
 高城 重彰 滝沢美代子 橘 秀樹
 戸嶋 信幸 友田 敏章 南祇 健至
 永吉 秀夫 成瀬 明輔 西田 信彦
 西村 章 根津 昭義 八田真一郎
 林 秀知佳 日高 啓晶 樋口 光雄
 深津 安 二木 剛彦 間田 潤二
 松本ひろみ 美宅 成樹 三輪泰一郎
 宮崎 寿和 茂木 憲夫 安村 通晃
 山下 雅弘 吉川 幸次 渡辺 博

(天文学科 (6名))

- 原田 紀子 藤本 正行 綿谷 由純
 安藤 裕康 篠原 正雄 三上 孝雄

地球物理学科 (16名)

- 伊藤 久男 石原 正男 小出 信介
 佐々木 賢 斎藤 和男 野田 彰
 藤本 博巳 増田 章 山形 俊男
 山下 輝夫 山科健一郎 山田 敏彦
 尹 宗 煥 吉崎 正憲 岡田 二郎
 中村 正治

昭和46年4月卒業生氏名

物理学科 (1名)

- 清水 哲男

昭和46年6月卒業生氏名

数学科 (30名)

- 岩崎 嘉章 西岡和比古 山口 一男
 伊吹山知義 石田 順二 大島 利雄
 加藤 昌英 鍛冶 明 川崎 徹郎
 木戸 義孝 北川源二郎 後藤 滋樹
 佐藤 雅彦 坂本 幸一 酒井 晋平
 酒井 文雄 田中 健一 仲本 進
 早川 隆雄 平野照比古 御前 憲広
 三谷 直紀 三宅 雅夫 三輪 哲二
 宮川 鉄朗 宮本 泉 向井 国昭
 谷島 賢二 山田 憲吉 吉田 正章

物理学科 (54名)

- 古川 芳 青塚 康生 秋沢 徹郎
 池畑誠一郎 板野 肯三 岩佐 泉
 内永由加子 小貫 明 大川 房義
 岡田 成文 岡村 良 金田 行雄
 川端 洋一 小泉 大一 小林 克己
 佐々木 隆 佐々木伸夫 斎藤 幸夫
 柴田 正和 島田 徳三 嶋田 雅生
 鈴木 克己 鈴木 隆則 住 明正

化学科 (44名)

- 大久保豊和 崎田 高明 水野 和美
 蜷川 洋一 早川 正美 山下 雅道
 綾部 真一 新井 和孝 飯田 逸夫
 石井 文雄 糸岡 栄芳 小沢 健志
 大沢 吉直 大島 昭信 大場 庄英
 岡村 憲明 岡本 博明 岡本 博司
 海藤 彰 笠井 豊 木原 寛
 木村 宗明 喜多野三夫 岸本 健雄
 国森 公夫 小池 康夫 小堀 悦孝
 五味 憲一 白川 保友 杉江 明彦
 竹内 英夫 竹屋 敦子 丹沢 嘉夫
 土屋 徹 中村 好美 西 保夫
 畠中 直人 林 茂雄 日野 照純
 福島 和夫 藤井 丈志 宮寺 達雄
 百瀬 博夫 樋口 正弘

生物化学科 (17名)

- 中村 俊 井上 順雄 池永 裕
 小野 哲也 大野 淑子 長田 弘徳
 黒田 敏子 佐野 弓子 沢田 純一
 島崎 幸雄 高山 豊

中村 正史 藤田 忍 山田 正夫
依田 欣也 若木 高善 渡部 好彦

生物学科(動物学) (9名)

松倉 泰子 猪原節之介 岩村 泉
佐原 雄二 角谷まゆみ 鳴海 鷹子
浜口 幸久 本川 達雄 森岡 清和

植物学 (5名)

金子 節子 片桐 仁一 田村 栄作
宝月 岱造 御園生 淳

人類学 (4名)

赤沢 桂子 口蔵 幸雄 佐藤 弘明
福島 靖夫

地学科(地質鉱物学) (11名)

伊藤 谷生 荒井 章司 浦辺 徹郎
越後 格之 奥田 義久 金田 博彰
谷 藤吉郎 豊原富士夫 西村 年晴
福山 博之 水田 敏夫

地理学 (11名)

権田 雅幸 千葉 立也 村田 育久
石田 興司 磯 望 中井 新光
藤崎 達也 増子 洋一 宮口 侗迪
宮崎 公順 湯沢 薫

以上合計 207 名

理学博士学位授与者

(6月14日付)

専門課程	氏名	論文題目
物理学	石川幸志	金属における軟線発射スペクトルのフェルミ端での異常について
同	宮原義一	マグネタイトの結晶変態と $(\text{GeZn})\text{Fe}_2\text{O}_4$ および GaFe_2O_4 の磁性の研究
同	移原健明	有限温度における金属の軟X線スペクトル端の異常
同	都留常暉	干渉性制動放射をコリメートすることによる単色 γ 線の生成
化学	横関昭道	気体電子線回折による分子内歪と分子内運動の研究——ピントロ化合物とその関連化合物の構造

専門課程	氏名	論文題目
生物化学	蔡 猷斌	キコウジカビ分生胞子発芽の生化学的研究
同	岡崎英雄	溶連菌の溶血毒素ストレプトリジン S' について
学位規則第3条2項該当	丸山哲男	分子およびスピンの不安定状態の磁気共鳴による研究

教官人事移動 (除退・休職)

氏名	所属	発令事項	発令年月日
柳田 友道	植物	教授に併任	46. 5. 1
岩崎 泰頼	地質	助手に併任	46. 5. 1
鈴木 正男	人類	助手に採用	46. 6. 16
松野 太郎	地物	助教授に配置換	46. 6. 1
岡崎 令治	生化	教授に併任	46. 7. 1
宮沢 辰雄	生化	教授に併任	46. 7. 1
及川 武久	植物	助手に採用	46. 7. 1
和田 正三	植物	助手に採用	46. 7. 1
池田 幸雄	地質	助手に採用	46. 8. 5

外国人研究員

教室	国籍	氏名	現職	在留期間
生物化学	カナダ	W. C. Lin	カナダバンクーバー大教授	46. 6. 15 46. 7. 31

基礎科学測定・情報センター

表記センターの新設要求が理学部から昭和 47 年度概算要求の一部として提出されました。関係者の一人としてその企画の沿革と内容の概略を紹介報告し、各位の御意見を仰ぎたいと思います。

沿革：理学部における研究と教育の水準を高める方策について昭和 39 年頃理学部将来計画委員会(委員長小谷正雄教授)は、熱心に検討を進め、基本理念を主とする意見を報告されました(昭和 41 年)。これをうけて山内理学部長は、その実現の方策として研究設備の整備を考られ、島内武彦教授を中心に各科各教室単位で要望をとりまとめそれを実現してゆこうと考え、その結果、約償円で設備の更新、整備が可能であろうと結論しました。これと平行して、同部長の発議により、理学部の研究テーマの展望が試みられ、講座ないし各科各教室をこえた理学部全体の立場で協同の研究プロジェクトないし総合研究ができないか、行ないうるとすればどのような

テーマが可能であるかについて、アンケートを行ない、またグループ別の検討をしてその結果生物科学、高温高圧物性、分子分光、その他の項目がいくつか浮び上がりこれを実施する場として、理学部総合研究施設の新設を求めることになりました。さらに、理学部全体の機能の向上をはかる意味で共通機器による測定サービス、工作サービスを内容とする測定センターの必要も同時につよく認識され、その新設もあわせて申請することになりました。

すなわち、昭和 42 年次項、理学部振興の基本策、および具体案が形をなしたわけであり、この具体案はある意味では理学部全体の総意をまとめた企画であり、その実現は平衡のとれた理学部の発展策としてきわめて望ましいものでありましたが、その後の弥永、渡辺両部長らの御努力にもかかわらず遺憾ながら実現をみずに至りました。その理由はこの間大学自身紛争をもち、また、理学部として資料館の新設、物理学科の拡充など重要な課題があり、それらが優先されたからであります、また一面全体の企画に強弱、濃淡の度合いが明確でなかったのにもよるよう思われます。

しかしながら、理学部全体としての発展策の推進の必要は依然として変らぬ事実であり、将来計画委員会、ついで総合計画委員会にひきつづいて計画のほり下げと実現に努力を重ねました。

すなわち、44 年度からは、総合研究施設と測定センターの両立の申請をやめ、総合研究施設一本にしぼって企画を進めることとし、また、昭和 46 年度には、総合研究施設の内容を新しく考え特定の部門に限定せず理学部附属施設の特色として、ここで新しい学問の芽を育てる場とすること、たとえば若手の研究者から、この研究施設によつて数年研究費をつみ、新しい部門として生長、定着したとき、学部内の新学科、新部門として吸収し、施設は再び新たなスタートの場につかてゆく、というような構想で本施設の実現を図ったわけであり、この考え方は久保理化学部長、赤松総合計画委員長によるもので長期的に見て理学部らしいよい構想であります。これは、そのままの形では認められませんでした、ある意では申の部分的実現ともいえるものとして情報科学研究施設の新設がみとめられ、新しい学問の芽を、附属研究施設において考ててゆくという基本構想が一部実現されました。

このように見て来ますと、理学部全体の研究、教育機能の向上を目標とした先の構想の他の半分すなわち測定センターの考え方が、あらためて緊要な必要事として浮び上がってくるわけであり、

小谷報告にありますように理学部の使命が高次、高水準の研究、教育の実施にあるとしますと、徒らに学部の規模を大きくすることは避けねばなりません。しかも一方では能力はできるだけと大型、弾力にする必要がわけてあります。その意味では理学部が附随的に将来もつべき研究機能は周縁にはアイソトプセンター、低温センター、計算センターの力を有効に利用できるように経営さるべきでありますし、またさらに、現在、自身も持っている情報科学研究施設と十分相補的に機能せねばなりません。その場合とくに近年大きく進歩している学問分野を理学部として包含することは重要であります。このような背景において、企画されたのが基礎科学測定、情報センターであります。

基礎科学測定情報センターの計画

理学における最近の研究は使用機単の大型化がいちじるしく、一学一講座単位によるとえば機関研究 A レベルでは取り扱い得ぬものが増えて来ました。そのような大型機器は学部全体の問題として計画し、その維持運用も同様にやってゆくことが必要です。

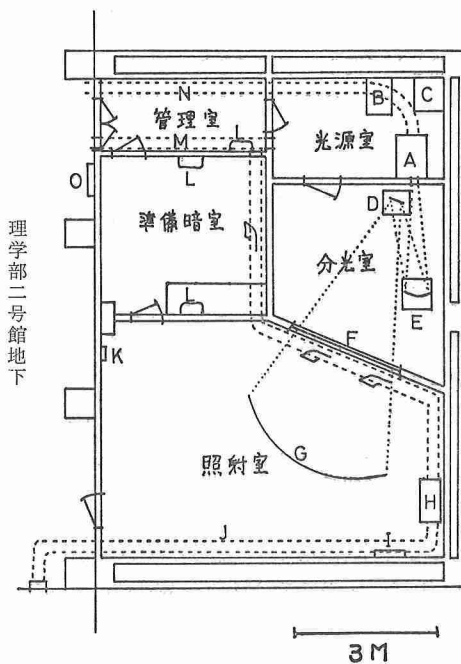
さらに赤外、NMR、X 線その他の通常の機器であっても、学部共通の運用にうつし、測定依頼に応じて専門家が測定を行ない、また保守、更新の注意と努力をはらってゆくことが必須であり、それは理学部のように基礎と応用の幅が広く、しかも各単位が小人数のところにあつてはとくに必要有効な能力向上策といえまよう。

第 3 には、化学のフミカルアブストラクト、生物のバイオロジカルアブストラクトにみるように、1972 年あたりを目標にして世界全体が膨大な科学情報（ケミカルアブストラクトは昭和 46 年頃で年間 30 万件をテープに入れ、電子計算機によって必要とする情報を検索しよう）につとめており、すでにテープ化は実施されました。そして、本年昭和 46 年に入つてからは、目的検索（oriented retrieval）というのは、個々のグループや部門ごとに、必要とする情報のコードを構造化し、プログラムをつくつて、全情報のテープからサブファイルをつくることでありまして、国外の大学、研究所では情報のテープ化につづく段階としてすでに実際の作業を始めたわけであり、これは文献検索の省力化からさらに一歩進んで、非専門の人に専門知識を解放されることであり、本学部のように多くの部門が併列して基礎と応用に分布し、その間の協力、協同が学問の推進に有効であり、望ましい状況にあることを考えますと、各部門が自分の専門について目的検索のプログラムを用意し、それを万人の用に供するようにしておくことは実に必要といわねばなりません。その作業の大部は現状では研究の段

植物学教室に建設された「大型 スペクトログラフ」

植物の生活は環境の条件に依存するところが極めて大きい、とくに光は著るしい効果を示す。近年、そのような生体制御に関する光エネルギー受容体として幾つか興味深い物質が発見されたが、まだ生体色素の正体が明らかでない光化学反応系が沢山残されている。新しい光反応が見出されたとき、まず作用スペクトルを測るが、そのためには分岐が大きく、広い波長領域にわたって高強度の単色光を得ることが望ましい。第二次大戦の直後、USDA (Beltsville) は 10 kW の炭素アーク灯とプリズムを用いて初めて光生物学用の大型照射分光装置を建設した。その後、Argonne 国立研究所や CNRS (Gib-sur-Yvette) には回折格子と Xe アーク灯を用いた装置がつけられた。

このたび植物学教室に建設されたスペクトログラフは理学部二号館南側にあった旧温室の位置に新しく地下室 (8.0×10.74 m²) をつくり、図のような光源部・分光



スペクトログラフ室
平面図 1:100

- | | |
|-----------------------|-----------|
| A: 光源ゼノンランプ | I: 同上用配電盤 |
| B: 同上用スターター (500 W 用) | J: 吸気ダクト |
| C: # (6.5 kW 用) | K: 遠隔制御装置 |
| D: 回折格子 | L: 流し |
| E: 反射凹面鏡 | M: 吸気ダクト |
| F: カットフィルター | N: 排気ダクト |
| G: 波長指示装置 | O: 主酒電盤 |
| H: 空調機 | |

階にあるといえるかも知れません。幸い、本学部には情報科学研究施設がありますので、研究的なことをそこでやってもらい、可能なものをセンターで利用する体制にするのかよいと思わます。この三つを土台とする以上の基本的な考え方にもとづいてどのように本センターの実現をはかるかといえ、第2の中小型機器の集約は時間をかけて個々の装置について納得のゆく検討をすべきでありましょう。したがって当面の申請内容からはずします。

次に、第3の情報検索については、情報科学研究施設と連繋して研究に関することは施設にゆだね、ただ、かなりの能力をもつ計算機をもって目的検索のプログラムができた部門から逐次サブファイルの作製と利用を開始することに。そのために、電子計算機 (HITAC 8500 程度のもの) と、サブファイル作製のためのデータベース (ケミカルアブストラクト、バイオロジカルアブストラクトテープ) の購入と、必要設備 (端末設備など) を申請する。

そこで残る問題として、第1の大型機器に関する計画であります。これは、300 MHz NMR 分光計、超高分解能赤外分光計、光電子分光計の3つを当初考えます。なお、48年度以降にあっては、計算センターの大型電子計算機との連繋により行なう研究、たとえばX線構造解析、などもとり入れることが必要でありましょう。この大型電子計算機とのつながりは情報検索、データファイルの上からも重要なことですが、計算センターの計画にも左右されることなので、まだ、つめた検討はしてありません。

以上を要するに、本センターの企画は、背景としては従来からの総合研究施設と測定センターの思想、理念のつづきであります。後者がやや網羅的であり、時代に即さなくなってきた点を考え、理学部に大型機器を整備し、また科学情報の利用方式を確立することを重点的に指向して申請することにしたわけでありました。

大型機器の整備に関連しては、本学で先年来、薬学、工学、それに理学部も参画して分析センターを設立したいという動きがありましたが、将来的には、そういう計画とも調整しうる所は調整してゆくべきでありましょう。また、第2の機器の集約も大切なことであり、次の段階に逐次具体化をはかるべきものと考えます。

以上、計画立案の要点を申しのべました。一層の御批判、御意見を御得て補正し、各位の御支持を得たく考えます。
藤原鎮男 (46.7.13)

(附記 47年度概算要求としては最終的には本計画はこのままの形では提出されるに至らなかった)。

部・照射部などをそなえたものである。光源には 6.5 kW Xe アーク灯 (ウシオ UXL-6500 DK) のほか、経済性を考慮して 500 W Xe アーク灯を併せて設備し、目的に応じて切換えられるようにした。光源から出た光は熱線を除かれたのち脱着式の固定スリット (2 mm ~ 10 mm まで 6 段階) を通過し、球面反射鏡 ($R = 3550$) で光路をかえたのち回折格子 (B and L 社製, 1200 本/mm, プレーズ波長 500 μm , 面積 $154 \times 206 \text{ mm}^2$) で分光される。回折格子から焦点面までの距離は約 6 m で、焦点面における逆分散は 0.16 $\mu\text{m}/\text{mm}$ である。使用可能な波長領域は 250 μm ~ 810 μm で、エネルギー強度はスリット 10 mm のとき波長 500 μm において約 6 $\text{kiloergs cm}^{-2} \text{ sec}^{-1}$ である。逆光および高次の回折光の混入は各種の遮光板およびフィルターを使用することによって避けた。高さ約 10 cm の単色光バンドの位置によってエネルギー強度が変化するので、多数の小鏡から成る照射面均一拡散装置をつけた。光源の選択・点滅は照射室から遠隔操作する。なお照射室の温度は実験の目的によって 10 ~ 40°C の範囲で一定にできるが、通常は 25 \pm 2°C に制御されている。

以上の建設に要した費用はつぎのとおりである。

1. CRM-FL 形大型回折格子照射分光装置 (日本分光 KK)
1,200 万円 [一般研究 A]
2. 建物新営費
628 万円 [一般研究 A に伴う建物工事費]
3. 空調装置取設
65 万円 [植物学教室校費]

本装置は上記の目的以外に種々の利用が考えられ、現在二三の計画が進められている。もし、本装置使用を希望されるばあいには内線 3279 へ御連絡下さい。

(古谷雅樹)

理学部ところどころ

古い文書から No. 5

前号にて一寸ふれておいた忠敬翁から久保木太郎右衛門氏に宛てた手紙を私なりに要約してみると、次の通りである。(この書簡も理学部に保管されている)。日付は 10 月 2 日となっているが調べていただいたところ文化 14 年 (1817) とのことであるから、(翁はその翌年文政元年 4 月 13 日に歿している)。亡くなる前年に書かれたものである。

御無沙汰しておりますが、いよいよ御健祥の御様子大慶に存じます。私も異常ありませんから御休心下さい。

先日は御同妊太八郎殿御死去遊ばされ御気の毒に存じり妙薫方へ御連絡しましたが、御覚悟の程をきゝ感心いたしました。しかし今後の経済等のこともあり御苦労のことと存じます。

(中 略)

地図のことについては、毎々お尋ねいただきありがとうございます。第子等も努力しており又筆耕までも雇ってはおりますが、とかく手間取っております。ようやく江戸図を²⁾ 此月初めに上納致しました。私も 1 年毎に体が衰え当年は暑さにも困っております。冷気の折は持病の痰咳に難儀しております³⁾。去々戊年までの頃に比べて元氣も大いに劣えました。このため地図も⁴⁾ 来年中に完成し、上納したいと努力しております。

(以下 略)

10 月 2 日

伊能勘解由

久保木蟠竜先醒

- (注) 1) 長女 稲, 在片貝
2) 文化 14 年 9 月
3) 文化 11 年
4) 文政元年 4 月歿

おわりに忠敬翁の経歴を紹介する意味で伊能忠敬記念館 (千葉県佐原市) 発行の冊子のうちからは沢恭三比執筆の記事を転載させていただく。

伊能敬忠先生について

先生の名声は世界に知られている。それは甚だ幼穉な日本地図しか無かった時代に天文を観測し沿海を実測して最も科学的な正確な地図を完成せられたからである。

先生は今を去る約 200 年前延享 2 年 (1745) 正月 11 日上総国山辺郡小関村に生れられたが、のち佐原の伊能家を継がれて家業に精励、家運を挽回せられて一郷の信望を集め、凶作には窮民を救恤、私儲を出された事が度々であった。

寛政 6 年 (1794) 50 才にして家業を長男景敬に譲って翌 7 年江戸に出て、幕府天文方高橋至時の門に入って天文曆数を学び、同 12 年 4 月始めて蝦夷 (北海道) の現地測量を行い実測地図を作って幕府に上り、ここに前人未到の大事業の第一歩が始まるのである。幕府は即ちその正確を認めて日本国沿海の測量を命じた。先生は前後 10 回に互る間、沿岸を主として日本国実測した。当時の交通の不便、路宿の困難な時代にあって、殆んど独力測量を行った。昼は地形の実測に暮れ、夜は天体の観

測に費し、誠にその脚足は東奔西走、その活動は昼夜不休、その精力絶倫、驚嘆すべきものであった。而して地図の正確なる事は、測量不能の場所は其の儘地図上に明かにし、聊も誤なからしめた。先生は家人を誡めて家訓三条を示されたが第一の書出に「仮にも偽をせず」とあるに合致している。又幕命を受けて「古今にこれ無き日本国中の測量御用を仰付けられ」と此上なき大きな誇りを持って勉勵せられ、この故に困難な大事業も完成を見るに至ったと云える。地図の正さはこの後英国が近海の測量を請うた時、幕府は先生の地図を示した所、その精密正確さを知って測量を中止した一事でも知る事が出来る。かくて文政元年(1818)4月13日74才を以て江戸八丁堀亀島町の邸で歿されたが、遺命によって師高橋至時の墓側に営まれた。然し幕命による地図の作成は中途であったので、門人等は喪を秘して事業を続行し、文政4年に至って大日本沿岸海輿地全図及び輿地実測録を完成して上呈し、然る後にその喪を発表せられた。幕府はその賞して嫡孫忠誨に5人扶持及び町屋敷を給し、且つ永代佩刀を許した。明治16年2月27日には特旨を以て正四位を追贈せられた。先生の遺書竝に遺品は85点、附として先生の手沢本110点、忠誨遺品20点と共に昭和32年2月19日重要文化財に指定せられたが、それらは何れも先生の偉大業績を物語っている。

忠敬翁のことは一応完了ということにして例により新聞の切抜きから理学部関係の記事を。

明治24.10.20 山形自由

坪井正五郎

留学中に世界的名誉を博す

去る22年中、文部省の命に依りて欧洲へ留学し、現今英国に在りて人類学の研究に従事し居る坪井正五郎氏は今年倫敦府にて東洋学会開設の際氏は我が帝国大学及東京人類学会の代表者として参会し、氏が筆する所の日本の古代研究に関する一篇の論文を提出せり。同会には欧洲諸国有名の博士おのおの其地の大学校及び学会等を代表して参集し、各自提出せし所の論文、其数140余に及びければ、同会にては其中に就き最優等の論文五篇を撰抜して之に金牌を授与せり。氏の論文はその撰中に入り、即ち賞牌を受得せり。是れ独り氏の面目のみならず、実に日本の榮譽といふべし。因に云う氏は明年留学満期にて帰期の筈なりと。(吉野誠治)

お 知 ら せ

○倉田奨励金候補者推薦要領

財団法人 国産技術振興会

1. 候補の対象 (1) 科学技術に関する研究のうち主として電気、機械、化学関係の研究。
(2) 若い研究者とし、グループでもよい。
2. 奨励金 総額1,500万円、1件当たり50万~200万円程度。
なお、2~3年の継続交付を行なうことがありますがこの場合も毎年手続きを必要とします。
3. 推薦件数 3件以内
4. 推薦方法 所定の推薦用紙に必要事項をご記入のうえ、当該学部長から本会あてにご送付下さい。
5. 推薦締切期日 昭和46年10月31日

○1972年度米国 NIH 特別研究員の募集について

標記のことについて、日本学術会議事務局長から別紙(写)のとおり依頼がありましたのでお知らせします。

(メ切 9月20日)

希望者のある場合は理学部事務室にお問い合わせ下さい。

○内藤記念 海外学者招へい助成候補者の推薦

1. テーマおよび候補者 人類の健康に関する自然科学の基礎的研究、なかんずく健康の増進、病気の治療と予防に関する基礎的テーマに意欲的に取り組み、自然科学の向上に寄与する外国の研究者。
2. 招へい助成金 (1) 本年度の海外学者招へい助成(前期分)の事業費として100万円を計上してある。
(2) 1件は往復の航空料金として50万円までを原則とする。
3. 推薦者 大学にあっては学長または学部長または研究所長とし、大学以外の場合には所属する研究機関の役職者とする。

4. 推薦件数 1学部, 1研究所あるいは1学会から1件とする。
5. 推薦の方法 所定(別紙)の用紙に必要事項を黒インクで記載し, 当財団あて送付する。
6. 推薦締切日 昭和46年8月31日とする。

○内藤記念研究助成候補者の推薦

1. テーマおよび候補者 (1) 人類の健康に関する自然科学の基礎的研究なかならず健康の増進, 病気の治療と予防に寄与する基礎的な独創テーマに意欲的に取り組んでいる研究者。
(2) 1カ年の研究助成を原則とする。
(3) 候補者は単独であっても, または協同研究であってもよい。協同研究の場合には主任研究者を明示されたい。
2. 研究助成金 本年度の内藤記念科学奨励金(研究助成事業賞)2,300万円を計上してあるが, 1テーマにつき1カ年の助成額は100万円を標準とする。
3. テーマ推薦件数 1研究機関(学部・研究所など)から1件とする。
4. 推薦者 推薦者は, 大学にあっては学長または学部長あるいは研究所長とし, 大学以外の場合には所属する研究機関の役職者とする。

○内藤記念 国内留学および海外留学助成候補者の推薦

1. テーマおよび候補者 (1) 人類の健康に関する自然科学の基礎的研究なかならず健康の増進, 病気の治療と予防に寄与する基礎的な独創テーマに意欲的に取り組んでいる若い研究者。
(2) 大学院博士課程の所定単位を取得した者, または大学院博士課程を修了した者に限る。
(3) 学位(博士)を受領している者, または受領の見込ある者
(4) 留学受入先の承諾または内諾を得ている研究者。
(5) 日本国内に留学が決定して

いる者または留学中の者は外国人であっても差支えない。

2. 留学補助の期間 1カ年以内の留学補助を原則とする。
3. 留学助成金 (1) 本年度の留学助成(前期分)の事業費予算として250万円を計上してある。
(2) 海外留学においては, 長期の場合は往路の航空料金を, 短期の場合は往復の航空料金の実費を, それぞれ助成するものとする。
(3) 国内留学の場合は滞在費として年額36万円を助成するものとする。
(4) 外国人の日本国内留学の場合は, 滞在費を若干増額することがある。
(5) この助成金は留学に限るものとし, 学会またはシンポジウムなどの出張費は対象外とする。

○内藤記念研究成果刊行助成候補者推薦

1. テーマおよび候補者 (8) 人類の健康に関する自然科学の基礎的研究なかならず健康の増進, 病気の治療と予防に寄与する研究成果の刊行助成を希望する研究者。
(2) テーマは単独研究であっても, または協同研究であってもよい。協同研究の場合には主たる研究者を明示されたい。
2. 刊行助成金 本年度の研究成果助成の事業費予算として100万円を計上してあり, 1テーマの助成額は50万円ないし100万円を標準とする。
3. テーマ推薦件数 1研究機関(学部・研究所など)から1件とする。
4. 推薦者 推薦者は, 大学にあっては学長または学部長あるいは研究所長とし, 大学以外の場合には所属する研究機関の役職者とする。
5. 推薦方法 所定(別紙)の用紙に必要事項を黒インクで記入し, 当財団あて送付する。
6. 推薦締切日 昭和46年8月31日とする。
以上詳細は理学部事務に問合わせのこと。

編 集 和 田 昭 允
理・1号館 217号室 内線 2298